第66回（2022年度）　北海道開発技術研究発表会論文

冬の沿道景観活用による地域協働事例
―シーニックバイウェイ北海道における冬の取組み―

北海道開発局　建設部　道路計画課　　○水野　亮介
北海道開発局　建設部　道路計画課　　鳥越　悠加
一般社団法人　北海道開発技術センター　橋本　澪奈

シーニックバイウェイ北海道は、現在14つの指定ルートと3つの候補ルートがあり、活動団体約500団体による個性を尊重した多様な活動が全道で展開されている。
本論では、北海道らしさを活かした冬季の地域協働活動についての背景や実施状況等を報告するとともに、その課題と今後の可能性について考察した。

キーワード：シーニックバイウェイ北海道、観光・景観、地域協働

1.　はじめに

シーニックバイウェイ北海道は、地域に暮らす人が主体となり、企業や行政と手をつなぎ、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを行う取組みである。2005（平成17）年よりスタートし、2023（令和5）年1月現在、14 の指定ルートが認定、3つの候補ルートが登録されている（図-1）。

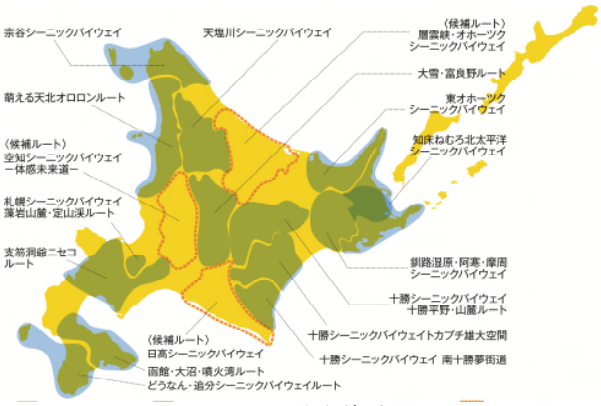

図-1　シーニックバイウェイ北海道 全 17 ルート

シーニックバイウェイ北海道の活動団体約500団体により、参加団体の個性を尊重した多様な活動が全道で展開されている。地域住民を主体とした積雪寒冷地の北海道らしさを活かした冬季地域協働プロジェクト（冬季イベント、雪かき・除雪ボランティア等）も各ルートにて行われている。

本論文では、冬の沿道景観活用による地域協働事例として、シーニックバイウェイ北海道における冬の取組みについての背景や実施状況等を報告するとともに、冬季沿道景観を活用した地域協働プロジェクトにおける課題と今後の可能性などについて考察した。

2. ルートにおける取組み状況

2005（平成17）年のシーニックバイウェイ北海道の制度開始以来、冬季地域協働プロジェクトが全道各地で行われている（表-1）。その中でも、現在も継続した活動が展開されている道央・道南地域の取組み状況について詳細に記す。

表-1　ルートにおける取組み一例

対象ルート	名　称	実施内容
支笏洞爺ニセコルート	シーニックナイト	ルート内の3エリアをキャンドルの灯りで繋ぐ
	冬道ツルツル路面対策	地域協働によるペットボトルへの砂詰め作業及び砂まき活動
大雪・富良野ルート	ウィンターサーカス	アーティストと地域の協働による冬のランドアート10年プロジェクト（2006～2016年）
東オホーツクシーニックバイウェイ	ガードレールの雪かきボランティア	地域住民によりガードレールに張り付いた雪壁の除雪を行い、国道沿道から良好な景観を提供
函館・大沼・噴火湾ルート	シーニックdeナイト	手作りのワックスキャンドルをルート内の各地に設置
萌える天北オロロンルート	流雪溝を利用した除雪ボランティア	地域外から除雪ボランティアを募集し除雪・排雪作業を行い、地域住民との交流や地域での体験を提供
十勝シーニックバイウェイ南十勝夢街道	南十勝夢街道イルミネーション	ルート内で灯されたイルミネーションを巡るための「南十勝イルミネーションマップ」を作成
札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山渓ルート	冬の雪あかり	町内会や企業、施設、学校などが連携し、幻想的なキャンドルの景観を提供
どうなん・追分シーニックバイウェイルート	どうなん追分シーニックdeナイト	ルート内の各種イベントと併催してキャンドルのあかりを灯す

MIZUNO ryousuke, TORIGOE haruka, HASHIMOTO reina

(1) シーニックナイト（支笏洞爺ニセコルート）

支笏洞爺ニセコルートは2005（平成17）年に指定ルートに認定され、ウェルカム北海道エリア、洞爺湖エリア、ニセコ羊蹄エリアの3エリアで構成されている。

2005年にニセコ羊蹄エリアの活動団体が実施した「ニセコ雪原祭」が観光客や地域住民から好評だったことを受け、ルート内の3エリアをキャンドルの灯りでつなぐ「シーニックナイト」の取組みを2006（平成18）年から行っている。毎年、活動団体が中心となり地域住民や企業、学校等と連携し、スノーキャンドルの制作やキャンドルの点灯、雪像の制作等に取組んでいる（写真-1,2,3）。また、既存の地域イベントとの連携も図れており、地域内に定着した取組みとなっている。

近年はコロナ禍を考慮し集客イベントは縮小して開催しているが、各自がそれぞれの場所で灯したキャンドルの灯りを撮影した写真や動画を、指定されたハッシュタグと共にSNSに投稿することで、SNS上での交流促進を深めている（写真-4）。

表-2　シーニックナイトの概要

対象ルート	支笏洞爺ニセコルート
実施期間	2006(平成18)年～ 毎年1月末～2月にかけて実施
場　所 (2019年度※1)	**ウェルカム北海道エリア** 恵庭市：国道36号恵庭駅前 他17会場、 恵み野地区、道の駅花ロードえにわ※2 千歳市：光と氷のオブジェ 国道337号仲の橋通 ～道の駅サーモンパーク千歳、 支笏湖雪明かりの散歩道 **洞爺湖エリア** 壮瞥町：道の駅そうべつ情報館i 洞爺湖町：洞爺湖温泉冬まつり 洞爺湖汽船本社前特設会場 **ニセコ羊蹄エリア** ニセコ町：ニセコ駅前温泉綺羅乃湯/ニセコ駅前 Scenic Night in Niseko、 シーニックヤキニクナイトinニセコ 喜茂別町：郷の駅ホッときもべつ周辺 倶知安町：旭ヶ丘スキー場と倶知安国道5号沿い、 倶知安町峠下チェーン着脱場、 八幡ビューポイントパーキング 小樽市：おたるワインギャラリー周辺 赤井川村：都小学校前都地区国道、道道付近、 国道393号駐車帯、 道の駅あかいがわ 他
主　催	シーニックナイト実行委員会

※1：コロナ禍前の2019(令和元)年度の実績を記載

※2：2019年度は工事のため施設前の国道36号にて実施

写真-1　スノーキャンドルの制作

写真-2　キャンドルの点灯

写真-3　雪像の制作

写真-4　SNS上での交流促進

(2) シーニックdeナイト（函館・大沼・噴火湾ルート）

函館・大沼・噴火湾ルートは2006（平成18）年に指定ルートに認定され、ルート指定記念事業として「シーニックdeナイト」の取組みが開始された。

「シーニックdeナイト」は、国道5号沿線の函館新道沿線の植樹枡に植えた花の維持活動を行う「はこだて花かいどう」（2004（平成16）年から開始）で撤去した花を再利用してワックスキャンドルを作り、それらを国道や道道沿線、観光施設などに設置する取組みである（写真-5,6,7）。各会場に設置するワックスキャンドルは、実行委員会の構成メンバーや地元住民らの手によって製作されているほか、12月から1月下旬にかけて観光客に向けたワックスキャンドル製作体験会も各地で実施している（写真-8）。

表-3　シーニックdeナイトの概要

対象ルート	函館・大沼・噴火湾ルート
実施期間	2006(平成18)年～ 毎年2月上旬～下旬の週末に実施
場　所 (2019年度※1)	函館市：函館新道、函館朝市、五稜郭公園、 函館市縄文文化交流センター、 函館市地域交流まちづくりセンター、 亀田八幡宮境内 北斗市：矢不来天満宮 七飯町：大沼国定公園 森町：オニウシ公園 八雲町：噴火湾パノラマパーク
主　催	函館・大沼・噴火湾ルート運営代表者会議、 シーニックdeナイト実行委員会

※1：コロナ禍前の2019(令和元)年度の実績を記載

写真-5　キャンドルの点灯

写真-6 道の駅の活用

写真-7　幼稚園児の作品

写真-8　キャンドル制作体験会

(3) 冬の雪あかり（札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山渓ルート）

札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山渓ルートは、2009（平成21）年に候補ルートに登録、2011（平成23）年に指定ルートに認定された。札幌市南区で行われている「冬の雪あかり」は、南区内で開催されていた冬季イベントの情報交換を目的とした「雪あかり交流会」（2008（平成20）年12月）をきっかけにルート連携活動として始まった。ルートのほぼ全域で展開されており、参加団体も非常に多く、活動主体によって取組み状況が異なっているのが特徴である。

石山スノーファンタジー（石山地区）は、活動団体である町内会連合会と商店街が中心となり地域住民と協働で、街と商店街の活性化、並びに、地域コミュニティ意識の醸成を図ることを目的に、2008（平成20）年から行われている（写真-9）。業種に関係なく、多様な地域住民が参加し、美しい景観づくりに加え、住民の交流と賑わいをもたらしている。

雪あかりの祭典（芸術の森地区）は、地区の一部で実施されていたアイスキャンドル作りの取組みを町内会のまちづくりビジョンの一つに位置付け、同時にシーニックバイウェイの地域活性化事業として開始された（写真-10）。活動団体である町内会、美術館、大学などが連携し世代を超えて活動しており、相互の協力関係の構築に繋がっている。

定山渓温泉雪灯路（定山渓地区）は、活動団体である定山渓観光協会が2011（平成23）年に実行委員会を設立

し、各宿泊施設が個別に行っていたキャンドル点灯の活動を1箇所（定山渓神社）に集め、冬の温泉街における一イベントとすることを目的に始まった（写真-11）。雪と神社と温泉という北海道ならではの景観を形成することにより、新たな賑わい創出と観光客の誘致促進に繋がっている。

藻岩地区アイスキャンドル（藻岩地区）は、活動団体である町内会連合会が中心となりアイスキャンドルによる冬の景観づくりとして2007（平成19）年から始まった（写真-12）。美しい景観づくりによる環境美化と住民の創作参加による生きがいづくり、さらに住民相互の交流促進による夜間の交通安全や防災対策にも役立っている。

表-4 冬の雪あかりの概要

対象ルート	札幌シーニックバイウェイ 藻岩山麓・定山渓ルート
実施期間	雪あかり交流会：2008(平成20)年～ 冬の雪あかり：2009(平成21)年～ 毎年12月下旬～3月末に実施
場　所 (2019年度※1)	澄川地区、真駒内地区、石山地区、藻岩地区、 南沢地区、芸術の森地区、藤野地区、 定山渓地区、簾舞地区、藻岩下地区の計19箇所
主　催	各地区町内会連合会など（ルート構成団体）

※1：コロナ禍前の2019(令和元)年度の実績を記載

写真-9　石山スノーファンタジー

写真-10　雪あかりの祭典

写真-11　定山渓温泉雪灯路

写真-12　藻岩地区アイスキャンドル

(4) どうなん追分シーニックdeナイト（どうなん・追分シーニックバイウェイルート）

どうなん・追分シーニックバイウェイルートは2015（平成17）年に指定ルートに認定された。近隣地域にて先行して実施されていた「シーニックナイト」及び「シーニックdeナイト」を参考に、候補ルートであった2010（平成22）年より「松前街道シーニックdeナイト」の取組みが開始された。

現在は「キャンドルのあかりが繋ぐ道」をテーマに、既存イベントと併催した沿道景観づくりとして「どうなん追分シーニックdeナイト」が展開されている。寒中みそぎ祭りと連動した「みそぎキャンドル」では神社周辺や駅前にキャンドルを灯している（写真-13）。ルートを構成する9町のうち奥尻町を除く8町が道の駅を持つことから道の駅も拠点に含まれており、冬季における道の駅への集客に寄与している（写真-14）。本取組みは、冬季に限らず年間を通して活動を行っていることが特徴的であり、木古内チューリップフェアは毎年5月に（写真-15）、江差町ガイアナイトは毎年夏季の観光シーズンに行われている（写真-16）。

表-5 どうなん追分シーニックdeナイトの概要

対象ルート	どうなん・追分シーニックバイウェイルート
実施期間	2010(平成22)年～ ①木古内チューリップフェア：毎年5月4日 ②江差町ガイアナイト：毎年7月下旬～8月上旬 ③3町連携シーニックdeナイト：毎年12月下旬 ④江差年越しキャンドル：毎年12月31日 ⑤みそぎキャンドル：毎年1月14日
場　所 (2019年度※1)	①サラキ岬（木古内町） ②姥神大神宮前（江差町） ③道の駅あっさぶ（厚沢部町）、 道の駅みそぎの郷きこない（木古内町）、 横綱千代の山・千代の富士記念館（福島町） ④姥神大神宮前（江差町） ⑤佐女川神社・木古内駅前（木古内町）
主　催	イベントにより異なる

※1：コロナ禍前の2019(令和元)年度の実績を記載

写真-13　みそぎキャンドル

写真-14　道の駅との連携

写真-15　木古内チューリップフェア

写真-16　江差町ガイアナイト

(5) 冬道ツルツル路面対策（支笏洞爺ニセコルート）

冬季沿道景観を安全に楽しむためには、歩行者に対する冬道ツルツル路面対策も欠かせない。支笏洞爺ニセコルート（ニセコ羊蹄エリア）の喜茂別町においては、国道230号沿線の町市街地及び喜茂別小学校への通学路における冬季のツルツル路面対策が2017（平成29）年より行われている（写真-17）。

NPO法人きもべつWAOのメンバーにより、砂詰め作業や冬季の砂まき活動が行われているほか、2017年8月にはきもべつ夏まつりにて「スリップストップ！砂詰め大会」と題し、地域の子供達にアクティビティ感覚でペットボトルに砂を詰めてもらう体験会を実施した（写真-18）。また、砂まき活動で使用されるペットボトルには喜茂別保育所の年長児によるお絵かきペットボトルを使用しており、本取組みも冬季地域協働プロジェクトの一つとなっている（写真-19）。

表-6 冬道ツルツル路面対策の概要

対象ルート	支笏洞爺ニセコルート ニセコ羊蹄エリア
実施期間	2017(平成29)年～ 砂詰め作業：随時実施 砂まき活動：例年12月～3月頃にかけて実施
場　所	国道230号交差点付近（喜茂別町） 喜茂別小学校への通学路
主　催	NPO法人きもべつWAO
協　力	後志建設工業株式会社

写真-17　小学生による砂まき

写真-18　子供達による砂詰め

写真-19　使用するペットボトル

3. 今後の展開方策についての考察

冬の沿道景観活用による地域協働事例として、シーニックバイウェイ北海道の道央・道南地域における各種取組みについて紹介した。冬季沿道景観を活用した地域協働プロジェクトにおける今後の可能性、ルート間連携における課題とその展開方策等について考察する。

(1) 参加しやすい仕組みづくり

本論文にて紹介した地域協働事例は、取組みを重ねる毎に、各ルートにおける独自のプロジェクトとして定着してきている。シーニックバイウェイ北海道の関係者のみならず、地域住民、企業、学校等による参加も増えてきており、地域に密着した取組みとして認知度が高まっていると考える。一方で、シーニックバイウェイ制度は創設から19年目を迎え、主要メンバーの高齢化も少なからず認められる。多様な主体の参加は次世代への取組みの継承にも繋がり得るため、今後も引き続き多様な方々に参加いただけるよう考慮する必要がある。

また、各会場における情報収集や情報提供、事務局運営は、ボランティア的な活動が前提となることから、当面は各主体が出来ることを継続していく必要がある。SNSによる情報の受発信や、デジタルサイネージの活用等の取組みも有益である。

(2) 広域なルート間連携に向けて

シーニックバイウェイ北海道の道央・道南地域においては、各々のスタイルで冬の沿道景観を演出する取組みが展開されている。今後は、道央・道南地域共通のポスター制作やSNSの活用等、広域なルート間連携に関する広報・周知についての検討やさらなる展開が必要である。今後、各種広報手法の充実を図っていくためには、運用体制の強化や、運用経費の確保に繋がる収益事業等についても検討していくことが求められる。近年では、道路協力団体制度を活用して物販を実施するルートや、クラウドファンディングを活用するルートもあり、そのような取組みも今後重要である。

また、道北・道東地域における取組み箇所の拡大についても今後検討の余地がある。積雪寒冷地である北海道らしさを活かした冬季の沿道景観活用による地域協働プロジェクトを北海道内各地で活発化させ、シーニックバイウェイ北海道が全国に幅広く認知されることには大きな意味がある。

4. おわりに

地域住民の方々や来訪者がキャンドルの灯りで冬の沿道景観を彩り共に楽しむ取組み、並びに、冬道のツルツル路面対策は、シーニックバイウェイ北海道における冬季の地域協働プロジェクトとして着実に地域に定着している。また、関係者や国内外の来訪者からも今後の継続が望まれており、地域資源を最大限に活用した“競争力のある美しく個性的な北海道”を目指し、冬の沿道景観活用による地域協働の取組みが、ゆるやかな連携を図りつつ、徐々に北海道全体に広がっていくことを期待する。